【ポスター発表】

スクールソーシャルワーカーに求められる役割に関する検討

－子ども・保護者の語りから－

○　早稲田大学大学院　　高石啓人（8979）

〔キーワード〕スクールソーシャルワーク、当事者の語り、エンパワメント

１．研 究 目 的

今日の子どもをめぐる状況は深刻さを増している。そうした状況の中で、学校現場に福祉的な支援を導入する一策として、2008 年にスクールソーシャルワーカーが全国的に導入された。全国的な導入から 9 年が経過し、スクールソーシャルワーク研究も進展しつつある。スクールソーシャルワーカーの役割についても様々な立場から論じられ、研究が蓄積されている。例えば教師の視点からの研究や、スクールカウンセラーの視点からの研究も存在する。そうした現状の中で実際に支援を受けた当事者はどのように、スクールソーシャルワーカーを捉え、役割を考えているのだろうか。本研究はそのような問題意識に基づいて行われた。本発表では、当事者がスクールソーシャルワーカーの役割をどのように考えていたのかを検討することを目的とする。なお本発表は、日本社会福祉学会第 64 回秋季大会での発表を継続・発展させたものである。

２．研究の視点および方法

スクールソーシャルワーカーの支援を受けた 20 歳以上の男女(男性 3 名､女性 2 名)に、研究協力を依頼した。研究協力の許可が得られたので、半構造化面接を行った。なお、面接は支援を受けていた当時を振り返る形で行われた。当時の関わり方としては、子どもとして支援を受けた者が 4 名、保護者として支援を受けた者が 1 名であった。調査実施時期は 2016 年 2 月から 9 月までである｡スクールソーシャルワーカーの役割をメインテーマに設定し、自由に語ってもらった。質問項目としては「スクールソーシャルワーカーとはどのように出会ったか」「スクールソーシャルワーカーとどのように関わっていったか」「スクールソーシャルワーカーと関わったことによって変化したことはあったか」｢スクールソーシャルワーカーの良かった点｣「スクールソーシャルワーカーへの要望」などである。録音の許可が得られたので、録音を行い、逐語録を作成した。その後、佐藤（2008）を参考に質的分析を行った。

３．倫理的配慮

社会福祉学会の研究倫理指針を遵守した。研究協力者に、調査の趣旨及び方法、個人情報を含むデータの取り扱い、研究成果の公表について十分な説明を行い、同意を得た。ま

た、本研究は本学の倫理委員会の承認を得ている。

４．研 究 結 果

分析の結果、様々な概念が生成された。ここでは、紙面の都合上、いくつかの概念を記述する。子どもの視点から考えられた役割と、保護者の視点から考えられた役割には、共通する概念もあれば、異なる概念もあった。

子どもと保護者に共通していた概念は、「受容される」ということであった。例えば子どもでは、「自分を尊重してくれる」という概念があった。子ども自身がスクールソーシャルワーカーは自分の話をよく聞いてくれると感じていた。具体的な語りとしては意見を聞いてくれて、行動してくれる、という語りがあった。保護者からも、自分の話を遮ることなく丁寧に聞いてくれて、精神的にとても落ち着いた、というような語りがあった。

同様に顕著であったのが、「受容されたことにより、エンパワメントが起こる」という概念であった。スクールソーシャルワーカーが、子ども・保護者の気持ちを受け止めることにより、当事者が癒され、考えを整理でき、元気を取り戻してくという語りがあった。スクールソーシャルワーカーが、子ども・保護者の気持ちを受け止めていたのは「受容」という言葉に置き換えられるであろうし、元気を取り戻していく、というのはまさに「エンパワメント」と言えると考えられた。

また子どもに顕著であったのが、スクールソーシャルワーカーを安心して継続的に相談できる相手として認識していることであった。上記の受容のプロセスを経て、子どもはスクールソーシャルワーカーにケース終了後でも相談しようと考えていた。そうした要因には、おそらく信頼関係の構築が影響していると考えられた。

保護者に顕著であったのが、スクールソーシャルワーカーと関わったことにより、考え方が変わったという語りがあった。スクールソーシャルワーカーと関わる以前は、物事の原因を追求するような考え方をしていたが、スクールソーシャルワーカーと関わったことにより、現状を受け止めて前向きに考えられるようになったという語りがあった。

5. 考 察

スクールソーシャルワーカーにも、ソーシャルワークの基本概念である「受容」や「エンパワメント」が求められていることが考察できた。当事者の語りからは、直接支援に関する語りが多く、直接支援が重要である可能性が示唆された。学校関係者からは、他機関連携が評価されている現状を考えると、どの視点に立つのかによって、スクールソーシャルワーカーに求められる役割が違うことが考えられる。当事者にとって直接支援が大きな意味を持っていたのは、非常に困難を抱えていた時期にスクールソーシャルワーカーが関わっていたからだと考えられる。

最後になりましたが調査に協力してくださった方々、厚くお礼申し上げます。